



「ヴァナキュラー」とはなにか：
イリッチのジェンダー論批判序説

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011180

「ヴァナキュラー」とはなにか

——イリツチのジェンダー論批判序説——

萩原弘子

西洋近代の産業社会で進む制度化を批判するイヴァン・イリツチの著作は、とりわけ一九七〇年代のフランスで、そして七〇年代末以降の日本で、いわば「不穏当なファンタジー」をかきたてる書として読まれた。「ファンタジー」という語に軽侮、非難の意味を籠めて言うのではない。それがあらぬ空想や法螺、呑気でひとりよがりな夢物語とはおよそ違うもので、社会を変えてゆくのに欠かせない、人々が共有するリアルな力のことだとすれば、それこそは現代の管理社会の中で硬直する我々に必要なものだ。近年盛んなテクノクラートによるニューテクノロジー論、ポスト工業化社会論をみると、その必要性は切実であり、切実なだけ状況は絶望的と思われる。テクノクラートが描く至近未来のユートピアは、肌理細かく配備され人の眼や耳に直接的威圧感を与えぬ精緻なテクノロジーと、権力の存在を感じさせない精妙で一見分散的な管理機構と、異を唱えることなくそれらに順応する人々とで、上品に堅固に重装備されている。その未来図は、未来図とはいふものの既にテクノクラート主導の「技術開発」「新技術導入」や「機構改革」といったかたちで日々実現されつつあり、その実現されつつあるところに意義がある。つまりテクノクラートが語るユートピアは、現在ある技術体系や機構制度の激的な廃絶や改変を経ることなく、現在の社会の延長線上にある。いやそうした廃絶や改変を避けることこそが意図されているというべきだろう。そこではまさに人々の「不穏当

なファンタジー¹⁾が排除されている。この排除されているものを解放の思想と呼ぶこともできるだろうが、どう呼ぼうとここで私が言っているのは、誰か一人の脳髓内のロジカルな出来事ではなく、人々に共有されるトータルな力のことである。社会的任務を負った「不穏当なファンタジー」を我々が共有できるかどうか、それは我々をソフトで上品な制度の中で家畜とするようなテクノトピアを覆す変革の成否に関わる問題である。

イリッチは学校、交通、医療といった近代の機構制度が、どれほど人々の自律的に学ぶ力、移動する力、治す力を奪い、制度のサービスを受ける他律的人間づくりと、産業資本や管理機構の強大化、緻密化に貢献したかを論じてきた。イリッチの論述は斬新な問題設定、広汎な事例紹介、陳腐化していない用語と挑発的な論旨で人を惹きつけた。七〇年代フランスのエコロジー運動は、反開発、反管理、反集権や反巨大科学技術を闘う数多くの地域的運動の総称で、その陣容も当面する敵も様々であったが、エコロジスト達のファンタジーは少なからずイリッチに依拠していた。右か左かという対決軸をたてないイリッチの産業社会批判は、社会主義、或いは少なくとも現実の社会主義社会は資本主義と並ぶ産業社会のヴァリアントだと考えるエコロジスト達にとって「不穏当なファンタジー」の手本となった。たとえばエコロジストとして多くの発言をしたミシェル・ボスケ(アンドレ・ゴルト)は、「まったく現実的であると同時に完全にユートピア的でもある、大旨イリッチ的なプログラム」の実現を、とまで言った。⁽¹⁾

しかしイリッチの思想は、本当のところ人々の不穏当なファンタジーを鼓舞するようなものなのだろうか。一九八三年刊行された『ジェンダー』⁽²⁾は、今まで諸領域における近代の産業化、制度化を各論的に論じてきたイリッチが、それらを踏まえたより包括的な近代批判へ向けてまとめの時期に入ったことを示している。いわば「イリッチ的プログラム」の全体像が鮮明になってきたわけだが、この最新著を読んでなおミシェル・ボスケはイリッチ的プログラムの実現を、と言うのだろうか。かねてより私は、イリッチの立論のし方は企みが深く、まずは刺激的で有益なのだが、なにかその奥で読み手を倒錯やディレクティズムへと骨抜きにするものがあると感じていた。『ジェンダー』は

イリッチという思想家の姿勢を見極めるための興味深い著作であると思う。

本稿はイリッチのジェンダー論批判序説として、『シャドウ・ワーク』⁽³⁾(一九八一年)における「ヴァナキュラー(vernacular)」概念の検討を目的とする。「ヴァナキュラー」は、『シャドウ・ワーク』以降イリッチの思想の重要概念であり、その検討は新著『ジェンダー』を論じるために欠かせない作業である。そして同時にイリッチの何が、人々のファンタジーをとりあえず泡立たせるのか、を考えるためにも必要なことと思う。イリッチに触発された人々のファンタジーは、どうやらこの「ヴァナキュラー」をめぐるものであるらしいからだ。

一、「ヴァナキュラー」という語

「ヴァナキュラー」という形容詞は一般に英語では「土地のことば固有の」といった意味の、言葉に関する語であるが、これにイリッチは独特の意味付与をして使っている。それは「交換という動機を持たない人々の活動を示す語、人々が日々の必要を満たすためにする自律的で非市場的活動を意味する語」(『シャドウ・ワーク』マリオン・ポイヤーズ版、⁽³⁾五七頁)である。その活動は「官僚的な管理から免れており、固有のやり方で固有の必要を満たす」(五七―五八頁)。「ヴァナキュラー」は「産業的な(industrial)」の反対概念として選ばれた。近代産業社会は人を制度や商品に依存する無能者におとしめ、もはやニーズ(必要)とは呼べないようなニーズを作り出すために人々のニーズを操作、管理し、成長、開発を至上とする経済活動によって自然環境を破壊してきた。産業的なるものをこう批判するイリッチは、「産業的な」に「ヴァナキュラー」を対置し、その語に産業的ならざるものを代表させている。語の通常の意味とは違ふと見えるこの用法が、決して根拠のない勝手な意味付与によるものでないことをイリッチは次のように説明する。この語は「根づいていること」と「居住」を意味するインド・ゲルマン語系のことばに由来し、ラ

テン語では「家で飼っているもの、家で紡いだもの、家で育てたもの、家でつくったものすべてに用いられ、交換によつて入手したものに對立する」(五七頁)。さらに五世紀のテオドシウス法典に至るまでその意味で用いられていたことを挙げて、この語のイリッチ的用法が決して新奇なものではないことを示そうとしている。しかしことばの使用は語源や一五〇〇年前の用法に束縛されるものではないから、彼の語源探索が事実として正しいとしても、産業的ならざるものとしての「ヴァナキュラー」にはイリッチ独特の意味が籠められていると考えるべきだろう。語源的正統への先祖帰りは、なにが語源かという問題の解き難さも考え併せれば、実際には起こりえない。「私はいまここに、この語の古い息づかいをなほどこか復活させたい」(五七頁)と復活宣言をした時、イリッチは「ヴァナキュラー」という語に何を盛り込み、どう磨きをかけるかに関する全権を握ったのである。

二、価値としての「ヴァナキュラー」

さて『シャドウ・ワーク』でイリッチが論じる「ヴァナキュラー」には二つの面がある。どちらも「ヴァナキュラー」が産業的なるものに対置させられている点に変わりはないが、産業化以前の過去をどう扱うかという点がとりあえず異なるために、少々意味合いの違う議論になっている。

一つは現在の商品集中社会や関発至上主義を克服して実現すべき価値としての「ヴァナキュラー」だ。イリッチがヴァナキュラーだと考えるのはどのようなものか。たとえばサン・パウロの工場で生産されるプラスチック・バケツに駆逐された、地方のブリキ職人の手になるスクラップ利用のバケツである(九頁)。また学歴や免許状に結びつかない非特権的学習を人々に保証するという、南インド一七〇〇村で行われている図書館活動である(一六一―一七頁)。また「集中管理される工場で動力を生産し、それを遠方の顧客に配給する必要がない」、水車すら稀だった頃の太陽利用を基本とする伝統的農業文化もヴァナキュラーなるものである(六六頁)。イリッチが言及する「ヴァナキュラー」

や商品依存的でないものには、今行われているものもあるし、既に失われて過去となったものもある。その過去も数年前から数百年前まで様々である。つまり「ヴァナキュラー」は時間性を排した価値概念として使われている。そして当然それは実現すべき価値である。

第一エッセー「公的選択の三つの次元」⁽⁴⁾で、イリッチは実現すべきヴァナキュラーについて次のように論じている。望ましい社会の選択は、今まで資本主義的開発か、社会主義的開発かという一次的政治モデルで考えられてきた。しかしこれでは社会で採用される技術については問題にできず、技術は目標に至る為の手段として専門家に任せられ、結局右も左も成長至上のハード・テクノロジーを採用してきた。その弊害が露わになってきた近年、技術に関する新しい選択肢「ハードかソフトか」が論じられるようになった。しかし以上二種の選択だけでは十分ではない。それでは経済成長を至上とする陣営が主導するソフト・テクノロジー研究が、人々に決まった型の自律を強制することを妨げないからだ。そこでイリッチはさらにもう一つの選択肢「産業的かヴァナキュラーか」を加えて三次元の座標を提唱する。「三種の独立する選択が互いに垂直に交叉する、公的選択の軸として見えてくる。X軸には社会の階層制、政治的権限、生産手段の所有や資源の分配といった、ふつう「右」「左」ということばで言われる諸問題を私は置く。Y軸には「ハード」か「ソフト」かという技術上の選択がくる。そして「Z軸の下限には「所有すること」に、上限には「行為すること」に、充足を求めるのに適した社会組織を置く」(二一頁)。このZ軸下限にあるのが人を「ホモ・エコノミクス」と規定する商品集中社会である。上限には「実に多様な社会をずらりと扇型に並べよう。そこでは生活が自立自給の活動を中心に成り立っており、各々の共同体は成長を求めることに懐疑的となつて、独自の生活様式を作り上げていく」。そこに暮らす人は「ホモ・アーティフィクス(創造的工人)」であり、「生活の自立自給を求めて共有の環境を利用していくことが、生産と消費に替わって高い価値とされる」(二二頁)。イリッチはヴァナキュラーな社会を我々の選択の問題として論じている。ここでは「ヴァナキュラー」は実現可能な価値、実現すべき価値

である。

一九七〇年代、まだイリッチは「ヴァナキュラー」という語を使っていなかったが、エコロジスト達が彼から読みとった運動目標はまさに「ヴァナキュラー」の実現だったと言えよう。一般的に座標軸上の選択という問題のたて方は、その選択に無限の程度が許されているため、とりあえず相対的に「より……なるもの」へ向けて迂遠な選択を重ねていかざるをえない現実への適用度が高い。イリッチが『シャドウ・ワーク』第一エッセーで、現実のエコロジー運動やAT運動に大層鷹揚な賛同を示している（一六一―一七、二五頁）のは、「ヴァナキュラー」が価値概念であり、それが相対的で現実的であることの表明だろう。同じく「レコードよりギター、教室より図書館、スーパーマーケットで買ったものより裏庭で採れたものに価値があるとされる」社会（一四頁）、「意義ある非雇用が価値あるものとされ、賃労働は一定限度内でのみ認められる」社会（一五頁）が望ましいと言うのも、また問題は「ヴァナキュラーな仕事と産業労働の間の緊張とバランス」（二四頁）だと言うのも、「ヴァナキュラー」の相対的な実現可能性の表明だろう。価値としての「ヴァナキュラー」は明らかに未来の社会理念として論じられている。これをどう評価するかは後述する。ここでは二つの問題点を指摘しておく。まず三つの選択軸についてだが、日本でのイリッチ論が多くは最肩筋によるためか、こういう単純で巧みな保守性が批判されないのは悲しいことだと思う。すなわち社会主義実現は、「資本主義か社会主義か」という並列的二者択一の結果成就するものではないし、採用する技術の検討や、経済成長を至上とする価値観の克服といった課題を埒外に置いてはありえない。それらの課題について現存社会主義諸国がどういう惨状を呈しているようと、それは同じ轍を踏まないための歴史経験とすべきで、社会主義実現の課題と技術の問題、価値観や自由の問題とを別立てにすべきではない。そうすることは社会主義を相変わらず生産手段の所有や政権の所在の問題に留め、人々にとって今となってはさして重大緊急とも思えない課題に格下げすることだ。それは人々を、歴史経験という、社会主義を問うための舞台から降りさせ、検討されたことのない新しい課題「ヴァナキュ

ラー”に惹かれる無防備な初心者にする。斬新な問題設定や陳腐化していない用語は、手垢にまみれた用語で繰り返される不毛な教条的議論に倦んだ読み手を惹きつける。しかしそこには追求されてきた課題そのものが杜絶してしまいう危険と、批判の指針を持たない人々が新たな教条主義に陥る危険がある。

さてもう一つの問題点は、「懐古趣味に墮する危険」といった言い方でイリッチについてよく指摘されることだ。価値としての「ヴァナキュラー」が没時間的なものであれ、ヴァナキュラーなるものの範を過去からもってくる以上、懐古やアナクロニズムの倒錯はつきまとう。これにはイリッチ自身、読み手の倒錯を予め戒めるかのように、伝統への回帰という選択はありえず、それは「感傷的で破壊的」な熱情だと釘をさしている。彼が成長至上型社会に対立させ、実現を呼びかけるのは過去の伝統ではなく、「『ホモ・アーティフィクス』という人間観、つまり生活の自立自給に関する伝統的前提を回復した社会」（二二頁―傍点萩原）だというのだ。これは伝統的前提という没時間的価値の回復は過去の伝統への回帰ではないという、一見辻褃の合う言説のようだが、イリッチが「伝統」と「伝統的前提」の区別を本気でわかって欲しいのかどうかは疑わしい。そのことは、次に示す「ヴァナキュラー」の史実としての側面を検討するなかで引続き考えたい。回帰を否定する書き手に背いて伝統社会への懐旧に駆られるのは、読み手の責任だ。しかし読み手の責任を問うのは、回帰はありえないというイリッチのことばの真意を確かめるまで保留にしておこう。

三、史実としての「ヴァナキュラー」

これまで述べてきたイリッチの過去に対する態度は、時代的には様々な「ヴァナキュラー」だが、それぞれの歴史性をはじめから問題にせず、それらを実現すべき価値の傍証として利用するというものであった。これに対し、「ヴァナキュラー」はいつどこで失われたのか、その日付と場所の一回性を記録するというような過去への対し方もして

いる。そこで示されるのが、「史実としてのヴァナキュラー」とでも言うべきもう一つの面である。

「ヴァナキュラー」が失われる決定的な画期となったのはいつであり、どこなのか。別の言い方をすれば、近代ヨーロッパの産業化と制度化の萌芽をどこに見るか。イリッチはそれを一五世紀スペインの、ネブリハがイサベラ女王にしたカスティリヤ語文法に関する提言と、さらに遡って一一世紀ロレーヌでの「母語」という語の誕生に見る。いずれも起こったことがらの性質は、人々が話すヴァナキュラーなことば（つまりヴァナキュラー）が、制度を通して教えられる母語に変化したということだ。「ヴァナキュラーから公的に教えられる母語への転換は、商品集中社会の出現にとって、おそらく最も重要で、だからこそ殆んど研究されていない出来事である。ヴァナキュラーから教えられる母語へという根本的な変化は、次のような転換の前兆であった——母乳から哺乳壺へ、自立自給の生活から福祉へ、使用のための生産から市場のための生産へ」（四四頁）。母語と国家語を対立させて考える我々の常識と違って、寧ろ国家語の位置に母語を置き、母語の制度性を主張している。

萩原弘子

一一世紀ロレーヌで「母語」という用語が生まれた経緯がそれを証しているというのだ。イリッチの説明によれば、それはロレーヌ地方ゴルトツの修道院で起こった。ゴルトツはフランク語とロマンス語の接する地域で、かつ発展する二つの大修道院勢力の境界でもあった。そこでロマンス語圏から入り込んで来るクリュニー派に対抗するため、修道院の領域的主張として、ラテン語で行われていた説教が、人々のヴァナキュラーであるフランク語に切り替えられた。その説教の中で初めて「母語」という語が発せられた。人々は、フランク語が母語だと教会から教えられることになら。こうして教会は、人々の「母なることば」で語りかける「母なる教会」であると主張し、教会を離れては救済はありえないと人々に教え込んでいく。「母語という語は、まさに初めて使われたときから、日常の言語を制度のための道具にするものだった」（六二頁）。

これは、すべての個人が公的官僚制度のサービス（たとえば教育）なしには人となり得ない、という国民国家の前提

への地ならしを教会がしたとするイリッチの重要な主張につながっていく。しかし制度的母語がヴァナキュラーに替わって登場する決定的瞬間として挙げられたロレーヌ修道院の事例は、その事実性も疑わしく、論者の主張に合わせた恣意的な資料選択がされたのではないかと推測する。「母語」という語の誕生がゲルマン語圏、ロマンス語圏いずれで起きたかという問題は、戦後ヴァイスゲルバーとシュピッツァーによる論争のあったところだ。その時ロマニストであるシュピッツァーが示した一一一九年のラテン語資料中の用例が、文献的に裏付けのある最初のものとして認められ、現在に至っている。イリッチの「母語」「ゲルマン起源説は、ロレーヌの両語接壌地帯でこの語が生まれたとするK・ハイジッヒの論文に依拠しているようだが(一一八頁注、ヴァイスゲルバーも援用したハイジッヒのゲルマン語説)⁽⁵⁾が決定的証拠を欠くことは、既に衆知の認めるところではないか。⁽⁶⁾新著『ジェンダー』の構成上も、一一一一二世紀ヨーロッパで起きた転換は、立論の要となる重要問題である。近代制度化の萌芽は一一世紀にありとは、人を遼遠、茫漠の思いにさせかねない主張であるだけに、読み手を眩惑、籠絡する気がないのであれば、今頃になってハイジッヒ論文を使う理由を説明すべきである。日本語で「母語」と「母国語」の混同が起こりやすいことの原因は日本ナショナルリズムにあるが、「母語」の制度性というイリッチの主張によるなら、「母国語」のナショナルリズムを言うだけではすまないことになる。しかし「母語」の制度性を裏付ける証拠が疑わしい以上、そこまで考察を広げることができない。

ヴァナキュラーから制度的母語への転換の画期としてイリッチが挙げる、一五世紀スペインに関するもう一つの事例は、ロレーヌの事例と比べれば、その史実性については疑いがなく、歴史の意味については大雑把な定説めいたものもある。すなわち「言語は帝国の伴侶」と考えるネブリハが、文法書を書くことでカステイリヤ語の格上げと標準化をはかり、近代国民国家形成に資したことは既に広く認められていることだろう。しかしイリッチの論の主眼は、まだ文法書を持たなかったヴァナキュラーが、ヴァナキュラーは話しことば、とする常識と違って、出版物によって

も流通していたことに注目している点にある。数十のヴァナキュラーによる気儘でアナーキーな読書に人々がうつつを抜かしていることを、国家統一の妨げと促えたネブリハは、「無法な、教えられないヴァナキュラーによる読書を抑圧することを提案した」(四〇頁)。この時こそ「ヴァナキュラー」が、すなわちことばのヴァナキュラーも、生活の自律を人々に保証していたヴァナキュラーな文化的伝統も、失われていく画期となったというわけだ。

現代の商品集中社会の病根を、萌芽のそのまた萌芽にも遡って見極めることの意味はなにか。それは、同じことをやるわけにはいかない、と確認することだろう。しかしこうした史実としての「ヴァナキュラー」喪失の日付と場所を見極めることが、イリッチにとって二次的で付属的な作業であることは、一世紀ロレーヌの事例紹介の前に置かれた次の表明に明らかだ。「私は、ヴァナキュラーなことばとその再生の可能性を語ることによって、望ましい未来あることを、人々に知らせ議論を惹きおこしたい」(五八頁)。結局一世紀、一五世紀というイリッチにとって画期であるはずの日付も、記録されるや早々に、史実としてよりも没時間的価値として扱われる用意がされているのだ。

「母語」という語はその歴史性ゆえに捨てられたが、「ヴァナキュラー」についてはその歴史性の方が捨て去られた。ネブリハ提言の中でイリッチが注目するのは、その国家形成計画の深く巧みな破壊性以上に、そこに書き込まれたヴァナキュラーな書きことばの流通という事実なのだ。それは過去の確認というよりも、再生の有意性と可能性を求める姿勢の反映である。回帰はありえないとイリッチは言う。前述したように、彼にとって「伝統的前提を回復した社会」を未来に実現することは回帰ではない。一般に、歴史性が刻印されているはずの失われた伝統に、歴史性を排した価値、それも未来のための価値を認めると書き手が言う時、慎重を期して百の条件を付けても、読み手の懐旧や復古の倒錯を防ぐことはできない。回帰ではない、という言明以上の警戒がイリッチにみられないのは、失われて今はないものに対する彼の姿勢に、それを歴史性において捉える視点が大きく欠けているからにほかならない。

四、"ヴァナキュラー"のトリック

数年前から数百年の昔と様々な過去に"ヴァナキュラー"の存在を見、価値としての"ヴァナキュラー"の再生をイリッチは語る。"ヴァナキュラー"の史実性と価値性は、偶然併存する二要素ではなく、論理学に言う外延と内包のように切り離せない関係にある。そこに"ヴァナキュラー"がもつトリッキーな説得力の秘密がある。つまり外延の拡がりに厳密を求めるものには内包の価値概念が、内包に疑いを抱くものには厳然たる外延の史実が用意されていて、説得の網は巧妙に廻らされている。『シャドウ・ワーク』のイリッチは外延を鷹揚に広げ、内包の超時代的価値に充電して、中広い読み手の合意とりつけをはかっている。ところがその外延が、『シャドウ・ワーク』ののち、『ヴァナキュラー・ジェンダー』⁽⁷⁾『ジェンダー』と次第に絞り込まれ、『ジェンダー』では、中世も後期を除く一世紀までが"ヴァナキュラー"だということになるのだ。"ヴァナキュラー"を追って確認できることは、『シャドウ・ワーク』からも十分予想されることだが、イリッチの読み手に対する操作意志である。その詳論は別稿に譲るが、ここで『シャドウ・ワーク』邦版の巻頭エッセー「平和とは人間の生き方」⁽⁸⁾に、"ヴァナキュラー"が絞り込まれてゆく方向性を確認しておこう。

a、ジェンダー論の下絵

このエッセーは日本語版にのみ収められたもので、一九八〇年一二月横浜で開かれた「アジア平和研究国際会議」での講演がもとになっている。『シャドウ・ワーク』所収の諸論の中で最も新しく、『ジェンダー』の下絵が見られる。イリッチはこのエッセーで、ヴァナキュラーな「民衆の平和」と「パックス・エコノミカ」を対照させ、開発や経

済成長の上に成り立つ後者の暴力性を指摘して、あるべき平和研究を論じている。彼によれば「バックス・エコノミカ」の条件である開発は、生活の自立自給の諸活動を破壊し、土地によって異なる文化の固有性を押し潰して、財とサービスへの依存度の高さに価値を置く画一的経済システムへと統合してきた。生産・消費の増大はどんな政治陣営も掲げる目標となったが、その現実には必ず敗者がいるゼロ・サム・ゲームの拡大である。イリッチは「バックス・エコノミカ」が促すもの三つを掲げて、その暴力性を示している。それらを要約して言えば、第一に制度依存・商品依存による人々の無能力化、第二に環境の資源化・商品化、第三に男女間の全面戦争である。この中でイリッチの力点は第三の問題に置かれている。のちの『ジェンダー』では、男女の関係は前二点の問題解決の帰趨を決する根本問題と位置づけられることになるが、ここでは、扱い方に軽重があるにせよ、まだ三点並列的である。

イリッチによれば、男女の関係は二つの平和で全く異なる。「バックス・エコノミカ」が席捲する以前のヴァナキユラーな社会では、「生活の自立自給に関わるすべての仕事は男、これは女というようにジェンダー別にあてがわれている。社会にとって必要で文化的に意味づけられた具体的な仕事は、社会によって異なる。しかしどの社会もさまざまな限りの仕事を、その社会に固有で独自の方式で男女いづれかに割りふっている」(Resurgence, p. 19)。^⑧そこで男女は、ふり分けられたそれぞれの仕事をする者として、競合することなく成熟し、競合することなくともに生活を担い、文化を形づくっていた。「こうした具体的な仕事のふり分けの中にこそ、男と女のダイナミックな平和がある。これは平等とは別物で、男女相互の抑圧を制限するものである」(Resurgence, p. 19)。^⑨これに対し「バックス・エコノミカ」のもとで人々が従事する産業的労働(これには賃労働だけでなく、それを補完する家事労働など、あらゆる産業寄与的労働も含まれる)^⑩は、男女いづれでも従事できる中性的(neutral)で性別のない、(genderless)ものだ。しかし無性別の仕事をめぐる無性別オープン・コースの争いは、いつも男の勝ちだ。「バックス・エコノミカ」のもとで高い価値が置かれる有給の仕事に就くのは、まず男である。女に残されているのは、あまり有利

でない有給の仕事と、夫の賃労働を支える無給の家事である。こうして「労働が中性化した結果、開発が両性間に新しい争いをつくり出すことは避けられなく」(Resurgence, p. 19)。

b、"ヴァナキュラー"とジェンダーへ

以上基本的には『ジェンダー』のデッサンとなっているが、まだ男女のジェンダーは仕事のふり分けについて言われているだけで、時代を特定しての歴史記述も行われていない。これが『ジェンダー』で描かれるヨーロッパ中世の農村社会では、男女が、仕事だけでなくあらゆる点でいわば棲み分けており、使う道具、話すことば、その内容、所作やものの感じ方まで異なる。男女のジェンダーは通常決して侵犯し合うことなく、相互補完的にひとつの社会をつくっている。ヨーロッパでは一世紀を境に崩れ始めるが、ジェンダーはヴァナキュラーな社会の根本的な構成要件であったというのである。

彼の労働中性化論やジェンダー論が、歴史認識としても思想としても誤っていることを示すのは別稿の任として置くが、結局イリッチにとってジェンダーこそ"ヴァナキュラー"であり、"ヴァナキュラー"なるものとはジェンダーである、ということは指摘しておきたい。『シャドウ・ワーク』で"ヴァナキュラー"に相対的で現実的な解放の夢を読みこんだ従順な読み手は、いつのまにか昔一世紀のジェンダー社会を範とする倒錯したアナクロニスティックな解放を夢見ることになる。ヴァナキュラーな社会では相互不可侵のジェンダーが「民衆の平和」を支えていたとイリッチがいうのは、まずは過去の確認である。確認の内容が誤っているにしても、行為の性質としては過去の確認である。しかし彼が"ヴァナキュラー"を時に歴史的なるものとして語り、時に価値的なるものとして語ってきた以上、過去の確認は価値の確認に通じ、ジェンダー回復の主張に通じている。歴史性を捨象した未来の社会理

念として論じられる「ヴァナキュラー」と、ゆるぎない事実として示される過去の「ヴァナキュラー」は、互いに互いの楯となって論破を躲し、結局「ヴァナキュラー」の価値を、その事実性を理由に認めさせるということになる。つまり「ヴァナキュラー」には、現実にあったことだから正しいのだという到底聞き入れ難い主張を聞き入れさせるためのトリックが仕組まれている。そのトリック性を描いて、未来の社会理念としての適否や歴史的眞偽だけを問うても意味はない。復古や懐旧を排斥することはがどればど書き込まれていようと、彼の論述の全体は復古や懐旧を排斥していない。それは「ヴァナキュラー」ということばを復活させた時に、イリッチ自身が準備したことである。

書き手の権能に敏感で意欲的なイリッチは、その権能を存分に揮って「ヴァナキュラー」概念をつくってきた。それだけに「ヴァナキュラー」には、彼の近代批判の狡知や限界が露わである。それは単に、「ヴァナキュラー」に何を盛ったかに露わなだけではない。見過ごしてならないのは、彼が自身の近代批判を「ヴァナキュラー」という概念ひとつで尽くそうとしていることだ。数世紀単位で歴史を見晴かして近代を位置づけ、「ヴァナキュラー」一語で産業化社会を相対化しようという試みには、状況のすべてを読解する代替大理論への彼の意欲が見てとれる。しかしその不遜な試みは、人々が、冒頭で述べたようなソフトな管理を打ち破り、「バックス・エコノミカ」とは違う平和を実現しようとするときの力とはなりえない。イリッチの産業社会批判が人々の力、冒頭で「不穏当なファンタジー」と呼んだものを力づけ、沸き上がらせるかに見えようとも、それは野心的書き手に導かれた人々の懐旧の思いがあぶく立っているにすぎない。人々が読み手として従順であるなら、管理社会でも従順だろう。西洋近代に対する批判は西洋近代の病弊を未だ蒙らない非西洋や近代以前に抛っては成就しない。そんなことを今更に確認しなければ

ならない程、「ヴァナキュラー」による産業社会批判が迎えられる背景には、闘うべき者の硬直と、硬直させるような状況がある。イリッチ批判は、それを打開するための作業と位置づけたい。

〈注〉

- (1) Michel BOSQUET: "Ce que les écologistes pensent deux-mêmes", *le Nouvel Observateur*, no. 645, 1977, mars, 22, p. 30.
- (2) Ivan ILLICH: *Gender*, Marion Boyars, 1983. 『シエンダー』岩波現代選書、一九八四年。
- (3) Ivan ILLICH: *Shadow Work*, Marion Boyars, 1981.
本論中頁数のみ記してあるのは右書よりの引用。邦訳版は『シャドウ・ワーク』岩波現代選書、一九八二年。
(4) 邦訳版『シャドウ・ワーク』では第二エッセーとなっている。
- (5) Leo WEISGERBER: *Die geschichtliche Kraft der deutschen Sprache*, 1959, S. 131. 尚、イリッチの注では Heising が Heising に誤植されている。
- (6) たとえば田中克彦『言語の思想』(NHKブックス、一九七五年、I章)や、*Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*, Walter de Gruyter, 1963, 'Muttersprache' の項を参照。
- (7) Ivan ILLICH: "Vernacular Gender", *Techno-Politica*, 1981, July. 「ヴァナキュラー・シエンダー」山本哲士編『経済セックスとシエンダー』新評論、一九八三年所収。
- (8) Ivan ILLICH: "Peace is a Way of Life", *Resurgence*, no. 88, 1981, Sept./Oct. pp. 15-19.
右の引用は (*Resurgence*, pp. x-y) を示す。
- (9) 賃労働と家事労働の補充については、拙論「イリッチのシャドウ・ワーク論——女性解放への隘路と迷路」(『インパクト』33号、一九八五年一月)を参照。